がん患者さんにお薦めのワクチン

- がん治療は、病気自体や化学療法等の治療により感染症にかかりやすい状態になります。日頃からの感染予防に加えて、ワクチン接種をすることで感染症にかかるリスクや重症化の予防となります。
- ワクチンを接種して感染症予防を行いましょう。

肺炎球菌ワクチン

（薬の名称：ニューモバックス® プレベナー20® バクニュバンス®）

- 肺炎球菌は、肺炎、髄膜炎、血流感染症などの原因菌です。がん患者さんは<u>肺炎球菌感染症にかかるリスクや重症化するリスクが高い</u>ため推奨されています。

帯状疱疹ワクチン

（薬の名称：シングリックス® 乾燥弱毒生水痘ワクチン「ビケン」®）

- がんの患者さんは、<u>帯状疱疹にかかるリスクが高く、かかった後も神経痛が継続</u>する可能性があります。そのため、ワクチン接種が推奨されます。

季節性インフルエンザワクチン

- がん患者さんがインフルエンザに罹患した場合、重症化する可能性があります。
- <u>患者さんだけでなく同居のご家族も一緒にワクチンの接種が推奨されます。</u>

新型コロナワクチン

- がん患者さん(特に高齢の方)は重症化リスクが高く、6-12 か月毎の追加接種が推奨されます。
- <u>コロナワクチンを接種しても、コロナにかかったときは抗ウイルス薬をお勧めします。</u>

ワクチン接種の対象となる方や各ワクチンの詳細は、次頁をご参照ください。
ワクチン接種をご希望の患者さんは、診察時に医師にご相談ください。

がん患者さんの感染予防にお薦めするワクチン

1，接種をお薦めするワクチン

○肺炎球菌ワクチン　薬剤名:ニューモバックス®、プレベナー20®、バクニュバンス®

肺炎球菌は、がん患者さんがかかる肺炎の原因となる代表的な細菌の1つです。肺炎以外にも、侵襲性肺炎球菌感染症とよばれる髄膜炎や血流感染症（血液中に肺炎球菌が入り、全身を回る病態）などの、より重篤な感染症を引き起こします。がん患者さんはこの侵襲性肺炎球菌感染症に罹患するリスクが高くなるため、予防が重要です。

プレベナー20®は 2024 年に新規に承認されたワクチンです。ニューモバックス®は、防げる肺炎球菌の種類が多いのですが、プレベナー20®、バクニュバンス®よりもワクチンの効果が低い可能性が指摘されています。バクニュバンス®を接種した場合には、追加でニューモバックスの接種を行うことが推奨されます。

○帯状疱疹ワクチン　薬剤名:シングリックス®、乾燥弱毒生水痘ワクチン「ビケン」®

水痘（みずぼうそう）や帯状疱疹（たいじょうほうしん）の原因になるウイルスは、水痘・帯状疱疹ウイルス（ヘルペスウイルスの一種）といいます。このウイルスに初めて感染すると、水痘になります。その後、ウイルスは背中の神経の一部（後根神経節）にひそんで残ります。そして、疲れやストレス、免疫力が落ちたときに、このウイルスが再び活動を始めて出てくると、帯状疱疹になります。

帯状疱疹になると、強い痛みが出ることが多く、一部の人では痛みが何ヶ月も残ることがあります。また、脳卒中や心筋梗塞のリスクが高くなることもわかっています。

特にがんの治療を受けている方は、帯状疱疹になるリスクが高いので、予防がとても大切です。

シングリックス®は、2～6ヶ月の間隔で筋肉内に２回接種する、生ワクチンではないワクチンです。健常人へ接種することで 80～90%前後の予防効果が報告されており、がん患者さんでも予防効果があることが報告されています。

乾燥弱毒生水痘ワクチン「ビケン」は、1 回の接種で健常人において約 60%前後※※の予防効果が報告されていますが、生ワクチンのため免疫が低下している方への接種はできません。（がん患者さんによっては、使用できない場合があります。）

※2025 年 6 月 1 日時点:日本では、シングリックスは 50 歳以上または帯状疱疹に罹患するリスクの高い 18 歳以上、ビケンは水痘予防もしくは 50 歳以上が対象となります。

○季節性インフルエンザワクチン

インフルエンザは、ワクチン接種により発症予防や重症化予防に一定の効果があります。

がん患者さんはインフルエンザに罹患した場合に重症化するリスクが高まるため、ワクチン接種が推奨されます。（鼻から吸入する生ワクチンは避けることが推奨されます。）

効果は通常流行する株は年によって異なることがあり、接種が可能な方であれば毎年流行シーズンにあわせて接種しておくことが望まれます。また、がん患者さんへの感染症伝播防止のために、可能であれば同居のご家族など周囲の方もワクチン接種を済ませておくことが望まれます。

○新型コロナワクチン **薬剤名:コミナティ®、スパイクバックス®等**

がん患者さん(特に血液がん患者さん)は健常人と比較するとワクチンの効果が弱いことが知られていますが、重症化予防や後遺症のリスク低減などの効果が示されています。6-12 か月毎の追加接種をすることで重症化予防となるため、定期的な接種が推奨されます。がん患者さんと健康な方と比較しても副反応の増加は見られていません。ワクチン接種後でも、新型コロナウイルス感染症に感染した場合は、速やかに医療機関を受診し、さらなる重症化予防目的に抗ウイルス薬の治療を受けることが推奨されます。

2，ワクチン接種費用の補助について

お住まいの自治体によっては、市区町村からワクチン接種費用補助がある地域があります。
費用補助をうける場合には接種できる機関が指定されている場合があります。
詳しくはお住まいの自治体のホームページや自治体の窓口等にご確認ください。

- **お近くの医療機関でワクチンを接種する際に、がん治療の主治医が推奨していることを分かりやすくする欄を準備しました。診察時にがん治療の主治医にお見せし、ワクチン接種について伺いましょう。**
- **ワクチン接種を推奨いただいた場合は、その推奨を記載いただくことで“主治医の先生からどのワクチン接種推奨いただいたか”を忘れることなく、お近くの医療機関スタッフやご家族に伝えることができます。**

＜＜がん治療の主治医の先生へ＞＞ **※推奨時には、以下の欄をご活用ください。**

～～

患者さんのお名前:______________________________様に

□肺炎球菌ワクチン(ニューモバックス®、プレベナー20®、バクニュバンス®)

□帯状疱疹ワクチン(シングリックス®)

□帯状疱疹ワクチン(乾燥弱毒生水痘ワクチン「ビケン」®)

(生ワクチンは化学療法中などで免疫が低下している方には接種できません。)

□季節性インフルエンザワクチン(不活化)

□新型コロナワクチン

□その他(　　　　　　　　　　　　　　)

のワクチン接種をお勧めします。(欄にチェック)

________年______月______日

病院名____________________________　医師________________________

～～

3，接種時期

ワクチン接種を希望の場合は、診察時に主治医に相談しましょう。

○肺炎球菌ワクチン・帯状疱疹ワクチン

-がん薬物療法による治療の場合は、「治療の 2～4 週間以上前」もしくは「治療の 3～6 ヶ月後」が目安とされています。※生ワクチン以外は主治医の判断次第で治療後間もない時期でも接種が可能なことがありますので医師にご相談ください。

-手術や放射線によるがん治療の場合は、接種時期は主治医にご相談ください。

※日本臨床腫瘍学会、発熱性好中球減少症（FN）診療ガイドライン改定 3 版、米国感染症学会、IDSA 2013 Guideline for Vaccination of the Immunocompromised Host.

○インフルエンザワクチン・新型コロナワクチン

-接種時期は主治医にご相談ください。
基本的に上記「肺炎球菌ワクチン・帯状疱疹ワクチン」と同様ですが、治療中でも接種可能なことがあります。

-毎年の流行シーズンになるまでに接種を済ませておくことが望まれます。

4.ワクチンに関するよくあるご質問

Q ：ワクチンには生きた病原体が入っているのですか？

A ：ニューモバックス®,プレベナー20®,シングリックス®,インフルエンザワクチン,新型コロナワクチンには生きた微生物は入っていませんので、ワクチンによってこれらのウイルスに感染することはありません。当院ワクチン外来では取り扱っていない”乾燥弱毒生水痘ワクチン”は生きたウイルスが入っているため、高度の免疫不全の場合は接種できません。

Q ：どのような副反応が起こりますか？

A ：ワクチンの種類にもよりますが、接種部位の発赤、筋肉痛などの局所症状のほか、発熱など全身性の反応が見られる場合もあります。詳しくは接種時に医師にご確認ください。接種から 1-3 日以内に症状は改善することが多いですが、もし副反応の症状が特に重かったり長期間持続するような場合は、接種した医療機関もしくは近くの病院への受診や相談をご検討ください。